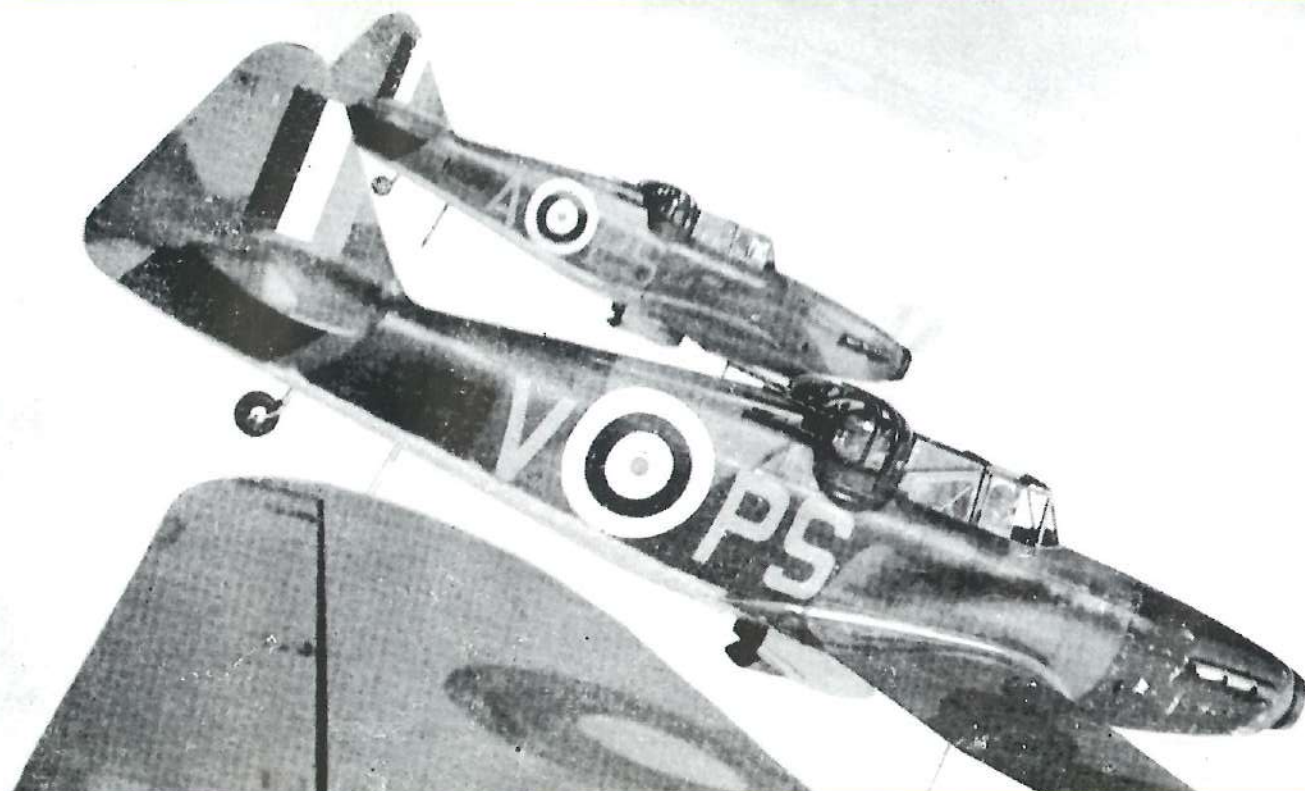


ATHENA SOURCES IN THE HISTORY OF WORLD WAR II

# PICTORIAL HISTORY OF THE WAR

A Complete and Authentic Record in Text and Pictures

第二次世界大戦の全容——文と写真による全記録



第二次世界大戦の進捗を伝えるイギリスの週刊誌  
写真を中心に図版 15,000 点超を収録、詳細なリストが付録

全 26 巻(15 冊に合本)・c. 8,850 pp., incl. c. 15,400 ill.・B5 判

第 1 回配本 8 巻(合本 4 冊) c. 2420 pp. 定価 本体 156,000 円+税 分売可 2019 年 11 月刊行

Part 1	Vols 1-4	(合本 2 冊)	27 August 1939 - 9 April 1940	978-4-86340-286-7	1360 pp.	78,000 円+税
Part 2	Vols 5-8	(合本 2 冊)	10 April 1940 - 26 November 1940	978-4-86340-287-4	1056 pp.	78,000 円+税

第 2 回配本 8 巻(合本 4 冊) c. 2240 pp. 定価 本体 156,000 円+税 分売可 2020 年 10 月刊行

Part 3	Vols 9-12	(合本 2 冊)	27 November 1940 - 8 July 1941	978-4-86340-288-1	1056 pp.	78,000 円+税
Part 4	Vols 13-16	(合本 2 冊)	9 July 1941 - 9 June 1942	978-4-86340-289-8	1184 pp.	78,000 円+税

第 3 回配本 7 巻(合本 4 冊) c. 2370 pp. 定価 本体 156,000 円+税 分売可 2021 年 10 月刊行

Part 5	Vols 17-20	(合本 2 冊)	10 June 1942 - 11 May 1943	978-4-86340-290-4	1184 pp.	78,000 円+税
Part 6	Vols 21-23	(合本 2 冊)	12 May 1943 - 11 April 1944	978-4-86340-291-1	1184 pp.	78,000 円+税

第 4 回配本 3 巻(3 冊) c. 1800 pp. 定価 本体 117,000 円+税 分売可 2022 年 10 月刊行

Part 7	Vols 24-25	(2 冊)	12 April 1944 - 13 March 1945	978-4-86340-292-8	1184 pp.	78,000 円+税
Part 8	Vol. 26	(1 冊)	14 March 1945 - 4 September 1945	978-4-86340-293-5	616 pp.	39,000 円+税

Athena Press

本書について

第一次世界大戦の報道関連資料復刻に続き、第二次世界大戦の資料復刻 Athena Sources in the History of World War II に取り組みます。イギリスとアメリカで、戦時中ないし戦後間もない期間に刊行された図版資料を扱います。

*The Pictorial History of the War* は第二次世界大戦の進捗を伝える週刊誌で1939年9月から1945年9月までの6年間に313号が刊行されました。およそ2、3か月ごとに製本用のカバーと扉、索引が出され、26巻の装丁版に仕立てられました。全体でおよそ9000ページ近くにも及ぶ重厚な刊物で、第1巻から第22巻までは各巻約260ページから320ページ、第23巻から第26巻までが各巻約600ページとなっています。この装丁版を底本にして、第1巻から第22巻までを11冊に合本、第23巻から第26巻まではそのまま4冊で、全15冊で復刻刊行いたします。

本誌はハッチンソン社とライブラリー・プレス社の2社から共同で刊行されました。編者はウォルター・ハッチンソン(1887-1950)、父が自らの名前を冠した出版社を立ち上げました。

ハッチンソン社は一般向けの本と雑誌の出版社で、上質なつくりで精緻な図版を用いた配本形式の参考図書—— *The Living Races of Mankind* や *Marvels of the Universe*、*Wonders of the World* など——が成功しました。そうしたことから資金的な伸長で、会社は多くの出版社を吸収、更に印刷会社、製本会社、製紙会社をも取り込んで急速に大企業となっていきました。

またウォルターは第一次世界大戦中に戦争省の出版局長を務めており、その経験からの判断で第二次世界大戦勃発時に大量の紙を購入して在庫したことが、戦時中にも会社の繁栄をもたらすこととなりました。

内容は写真、描画、地図などの15,000点以上に及ぶ大量の視覚素材によって構成されており、現代の第二次世界大戦史研究の図版資料としてとりわけて高い価値があります。一方、第一の目的がヴィジュアルの伝達であったものの、当時のニュースは政府や軍部によって厳しく検閲されていたので、同時にイギリスのプロパガンダの道具でもあったともいえるでしょう。

こうした図版中心のページに、軍部指導者や政治家の演説や発表、前週に起きた主要な事件の概要を扱う連載 *History of the War in Brief*、また前線から伝わるニュースや戦時下の女性、「銃後」、植民地や属領の参加、日本との交戦などの様々な事項のテキストが加えられており、戦時中の総合的な情報資料として見る事ができるものになっています。



Topics include, for example:

## General / Various

H. M. the King's Speech (3rd September, 1939) • Then and Now: 1914-1939 • Entertainments National Service Association • The Red Cross Lamp in War • Mine Warfare • United States and the War • The Economic War against Germany • Supplies for the Army • The Y.M.C.A. and the War • Feeding the British Army • Cameras over Germany • Scotland's Share of the War • The Capitulation of King Leopold • The Miracle of Dunkirk • The Balkan Melting Pot • Totalitarian War • Science in War • Hitler's Oil Drive • The Battle of the Atlantic • The Invasion of Russia • Methods of Economic Warfare • Shipbuilding in the U.S.A. • Health of the Army • D-Day Messages • The Flying-Bomb • Smashing the Wehrmacht • Operations of the Eastern Fleet • The Russian Offensive • Buchenwald Camp • Recovery and Repatriation of Displaced Persons • The World Security Charter • The Minesweepers' War • The Tripartite Conference of Potsdam • Radar

## Home Front / Society

Britain's Larder Is Fuller This Time • The Farmer and the War • War Finance at Home • Employment in War-Time • Parliament in War-Time • Labour Is Behind the Navy • Ulster's Triple Weapon • Balloon Barrage over Britain • British Finances Today • Welfare Work for the Troops • Air War on Britain • Mobilisation of Man-Power • The Battle of Britain • Britain's War Production • The Battle of London • The Ministry of Production • Mobilisation of Labour • Our Royal Ordnance Factories • Our Shipbuilding Feat

## Women

Women War-Workers in Civil Defence • The Women's Auxiliary Air Force • H.M. the Queen's Broadcast Message to Women • The Women's Royal Naval Service • The Women's Land Army • Women Engineers and the War • Women and the War

## British Empire / East Asia & Japan

The Empire Joins Up • How Australia Plans to Help • The French Colonial Empire • The British Empire, in War and After • India's Magnificent Contribution • H.M. the King's Empire Day Message • Our Colonial Air Armada • The Colonies Go to It • War Effort of the Colonial Empire • War Effort in India and Burma • Importance of the Sudan • The Symbol of Singapore • An Eastern Arsenal • Hong Kong as a Fortress • The Message of Canada • New Zealanders in Libya • At War with Japan • American and Japanese Navies • India: First Step to Freedom • America's "Burma Road" • The British Empire and Its Future • The Pacific Story • Japan's Ill-Treatment of Prisoners • Battlefield in Burma • Air Operations in Burma • The Japanese Soldier • With the British Pacific Fleet • The Japanese Air Force • Surrender of Japan • Japan's Day of Retribution





【シリーズ新刊!】

**Athena Sources in the History of the World War II**

**PICTORIAL HISTORY OF THE SECOND WORLD WAR** 第1回配本 vols. 1-5 978-4-86340-297-3 175,000円+税  
 2019年度刊行開始!アメリカの第二次世界大戦の写真記録。太平洋戦争の記録多数!以降続刊、全2回10冊、分売可。

【既刊】

**Athena Sources in the History of the World War I**

<b>The "Manchester Guardian" History of the War</b>	全9巻	978-4-86340-148-8	270,000円+税
現在のガーディアン紙が当時記述した戦争記録。半年ごとに状況を整理して解説。			
<b>The War Illustrated: Album de Luxe</b>	全10巻	978-4-86340-160-0	285,000円+税
大衆紙デイリー・メール傘下の出版社が出した週刊誌の再編集豪華版。センセーショナルな記事と大量の図版。			
<b>The Great War... I Was There!</b>	全6巻	978-4-86340-161-7	176,000円+税
終戦からおよそ20年後に出された戦争体験談集。週刊全51号をまとめて復刻。著名人手記多数。			
<b>The Illustrated War News</b>	配本：第1回-第8回		724,000円+税
グラフィック報道の嚆矢イラストレイテッド・ロンドン・ニュースによる、プロパガンダ色の濃い写真集的な戦争特集週刊誌。			
<b>Pictorial Sources on the United States in World War I</b>			
<b>U.S. Official Pictures of the World War + The United States Navy in the World War</b>	全2巻		86,000円+税
<b>Forward - March! (Vol. 1+Vol. 2)</b>	合本全1巻		42,000円+税
<b>Art and the Great War + The War in Cartoons</b>	合本全1巻		45,000円+税
第一次世界大戦におけるアメリカの貴重な写真・図画資料を復刻。			

【発行】

**Athena Press**

株式会社 **アティーナ・プレス**



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: **03(3946)2117** Fax: **03(5977)8026**

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】

## 第二次世界大戦 6 年間の軌跡

木畑 洋一 ● 成城大学名誉教授

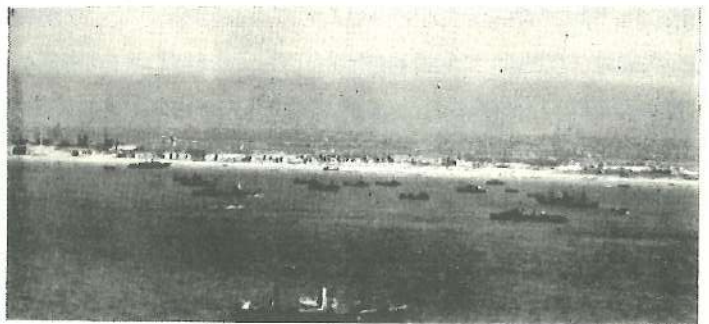
1939年9月、ナチス・ドイツのポーランド侵攻、イギリスとフランスの対独宣戦布告によって、第二次世界大戦のヨーロッパ局面が始まった。今回復刻される *Pictorial History of the War* は、その開戦時から大戦のアジア局面における日本の敗北で戦争が終わった後の1945年9月まで、6年間にわたってイギリスで毎週発行された情報誌である。もともと週刊誌として出された本誌は、数か月分（当初は2か月、後には3〜6か月）ずつまとめて製本され、26巻本という形をとることになった。

こうして作られた第1巻の冒頭には、1919年11月の第一次世界大戦休戦日から39年9月に至る戦間期ヨーロッパについての詳しい叙述が、「歴史的序」として付されている。その次にくる本来の第1号目は、「戦間期のドイツ」（無署名）という大戦前史の説明から始まり、次いで「なぜイギリスは参戦したか」（サー・フィリップ・ギブズ筆）が論じられる。そして最後の第26巻（313号が最終号）は、「日本に天罰がくだった日」（日本による降伏文書調印時の米国のトルーマン大統領とマッカーサー将軍、ソ連のスターリン首相の演説からの抜粋）という記事で締めくくられている。本誌ではこのようにして、大戦前史（ただし戦争のアジア局面での前史は扱われていない）から戦争終結までの歴史が、多くの写真・図版とともに読者に提供されているのである。毎号、戦争がどのように推移しているかは、「戦争解説」（*Commentary on the War*）というセクションで解説されており、日々の具体的な出来事に関しては、「戦争略史」（*History of the War in Brief*）と題する欄があげられている。

本誌は画報（*Pictorial*）と銘打っているが、文章にも相当スペースが割かれている。その文章は上記の例からも分かるように、無署名のものもあるが、筆名が分かるものも多い。たとえば、先に触れたサー・フィリップ・ギブズは、著名なジャーナリストである。また39年9月3日の開戦に際しての国王ジョージ6世による演説をはじめ、重要な演説やラジオ放送類も豊富に収録されている。その中でとりわけ目立つのは、1940年5月に首相に就任してイギリスの戦争を指導したチャーチルの演説の多さである。第1巻に収録されている海軍大臣時代のチャーチルによる「戦争の最初の一月」というラジオ放送を皮切りに、彼の議会演説やラジオ放送の主要なものは、各巻でみることができる。またローズヴェルト米大統領やスターリンの演説も要所におさめられている。その点で、本誌は大戦についての資料集としても役に立つ。

このように構成された本誌は、戦争の経緯についての情報を読者に提供しつつ、イギリス国民の戦意を高揚させることを目的としていた。戦場での死体写真のような戦争の残酷さを示す図版が少ないことも、そうした性格を示していると考えられる。しかし、それは当然のことであり、そのような制約のもとで、大戦についての多彩なイメージが提供されていることを重視すべきであろう。

一例をあげてみよう。40年5月末、ドイツ軍によって追い詰められた英仏軍が、ドーヴァー海峡を渡って撤退した「ダンケルクの戦い」は、英仏側の負け戦でありながら、撤退作戦の成功によって英仏軍の士気を鼓舞する役割を演じたが、これについての文章での説明には、6月4日の議会で作戦を報告するチャーチルの演説があげられている。そして、海岸に列を作る兵士、海に入って救助船に向って歩く兵士、兵士を満載した



PART OF THE GREAT DUNKIRK ARMADA  
A British naval communiqué stated that 222 British naval vessels and 688 other British craft took part in the evacuation of Dunkirk, as well as large numbers of French naval and merchant ships. Part of the great armada is seen above.

軍艦や民間船（この作戦で民間船の働きはめざましかった）、帰還した兵士にお茶をふるまう女性、「ダンケルクからの最後の到着者」としてのフランス人女性電話交換士、といった写真がならんでいるのである。

筆者が長く関心を寄せてきた、イギリス帝国各地からの戦争協力という問題も、本誌で結構重視されている。帝国を挙げての戦争というイメージの提示である。たとえば、ドイツ空軍による空襲にさらされながらイギリスが一国でドイツに対峙していたといっよよい1940年秋の第8巻には、当時の植民地相ロイド卿と1920年代に植民地相だったレオ・エイマリの二人による植民地の戦争努力についてのラジオ放送が収録されている。日本軍によるインド侵攻の危機も生じてきた1942年春、イギリス政府は、インドに独立を約束する方向へそれまでの姿勢を転換したが、第16巻では、その任務を負ったサー・スタフォード・クリップスのインド人に向けた放送「インド：自由への第一歩」に接することができるのである。

その他、女性の役割であるとか、戦争経済の問題とか、焦点を絞って本誌を繰ってみることも一興であろう。その助けになるのが、各巻につけられたきわめて詳細な写真・図版リスト（索引といった方がよい）である。自分の知りたい対象を扱っている写真や図版をこのリストで見つければ、それに関わる文章にも接する可能性が高い。パラパラと頁を繰ってみるのもよいが、いろいろな使い方ができそうな雑誌であると考えられる。

# 戦史の立体的把握に向けて

池田 明史 ● 東洋英和女学院大学学長

「……何よりも、シリアであれそのほかのどこであれ、われわれはフランスの領土に対する如何なる野心も持っていないことを繰り返し明らかにしておきたい。われわれはこの戦争において、植民地その他この種の利得を追求しているのではない。わがフランスの友人たちには、ドイツやヴィシー政権の見え見えの宣伝に乗せられることのないように願いたい。むしろ逆である。われわれは、自由と独立、そしてフランスの権利を回復するために、持てるすべての力を尽くすだろう。……」これは 1941 年 6 月、「クレタ失陥とその教訓」と題したウィンストン・チャーチル英首相の議会演説の一節である。本史料所収のテキストの一例だが、併載している当時の戦況・情勢分析 (Commentary) や事実経緯 (History in Brief) のリアルタイムでの記録に照らしつつ読めば、連合軍が地中海の要衝であったクレタを失ったことで、ドイツ軍が枢軸側であるヴィシー・フランス軍の支配するシリア・レバノンに侵攻する可能性が高くなり、これを先制抑止するために英国はシリア・レバノンへの派兵を決定した、という事情が判然とする。この地域を奪われれば、英国が生命線とするエジプトのスエズ運河の通航が脅かされるとの危機感までひしひしと伝わってくるのである。こうしたテキスト分析は、本史料の最大の特徴である大量の写真・図版・地図 (Illustrations and Maps) によってさらにリアリティを増す。その意味で本史料は、第二次世界大戦の連合軍とりわけ英国から見た通史を、文字通り立体的に俯瞰するには最適と言えよう。

現代中東の政治や国際関係を研究の対象としている私にとっても、第二次大戦の北アフリカ・中東における戦役が現在の同地域の混乱につながっているとの認識はあるものの、各戦線の実態や運動性の詳細について必ずしも馴染みがあるわけではない。本史料はその欠落を十分に補ってくれる。

それにしても、冒頭テキストの「フランス」を「アラブ」に、「ドイツやヴィシー政権」を「アメリカやヨーロッパ連合」に置き換えてみると、昨今シリア内戦に軍事介入したロシアの言い分にはほぼ重なる。「歴史は繰り返すのか」と自問する契機としても、有り難い史料である。



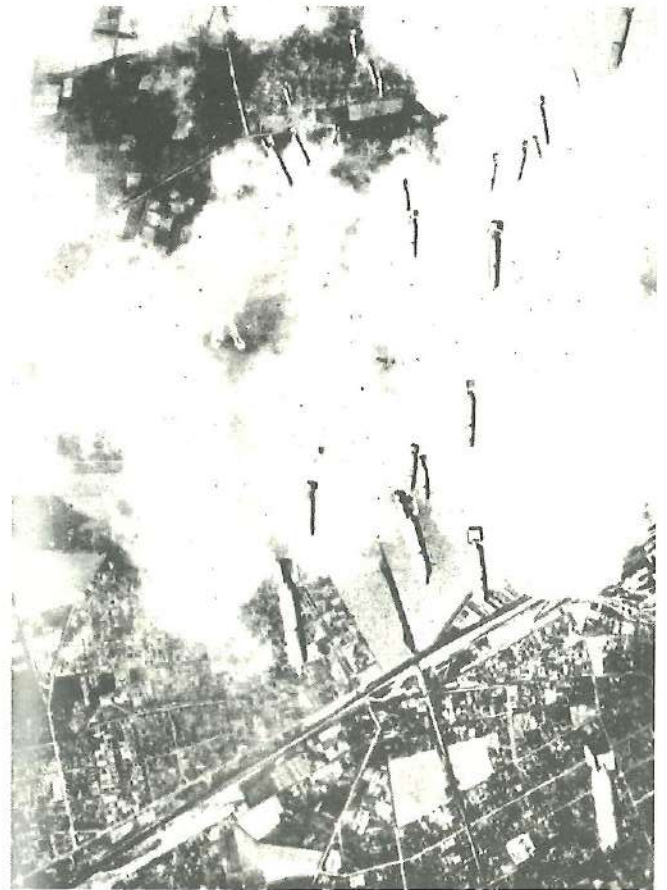
COOPERATION WITH THE R.A.F.  
A British pilot is seen at the top of the page. Below this page, a group of British soldiers are seen in the desert. Some of the most important  
parts of the British and French cooperation are contained in the 'The East'.



## 紙面を埋め尽くす写真やイラスト——歴史への想像力を大いに刺激してくれる史料

秦 邦生 ● 青山学院大学准教授

紙面を埋め尽くす写真やイラスト、そして著名人たちの文章——それらは読者になにを見せ、代わりになにを死角へと隠したのか。多分にプロパガンダ的性格も備えた *Pictorial History of the War* のページをめくっていると、そんな疑問が頭に浮かんでくる。1940年にジョージ・オーウェルは「右であれ左であれ、わが祖国」と唱えたが、この刊行物が克明に記録するのは、さまざまな左右の政治勢力が、打倒枢軸国という共通の旗の下にとりあえず同居する様子である（まさしく「吳越同舟」のように）。目次をめくると、当然のように戦争指導者ウィンストン・チャーチルの名前が頻りに目に飛び込んでくるが、13巻にはのちに彼から首相の座を奪う労働党のクレメント・アトリーの記事があるし、その前後からはルーズベルトやスターリンの名前もたびたび登場している。著名な労働党系知識人ジョン・ストレイチー（かつて夭逝したマルクス主義批評家クリストファー・コードウェルの遺稿集に序文を寄せたこともある）が、戦争中には“Squadron-Leader”の肩書でイギリス空軍の広報を担当していたことが分かるのも興味深い（例えば、24巻以降の記事を参照）。表面的には団結していたこうした人々のメッセージのあいだに、見えざる断層は走ってはいなかったのか。あるいは、彼の記事を飾る爆撃機や巨大な12,000ポンド爆弾の写真は、遂行中の戦争を生々しく示してくれると同時に、片やそれがどれほどの破壊の渦をドイツの各都市に巻き起こしたのかは、想像力をもちいてW・G・ゼーバルトのいう、まさに書かれざる「破壊の博物誌」を構想するほかはない。こうした疑問から、歴史への想像力を大いに刺激してくれる今回の復刻版の刊行を歓迎したい。



### THE SYMBOL OF SINGAPORE Growth of an Imperial Garrison at the British Headquarters in the Far East

The appointment of Air Chief Marshal Sir Robert Brooke-Popham as Commander-in-Chief Far East has made a big difference to Singapore, which he has chosen as his headquarters. For the first time all British land and air forces in Malaya, Burma, and Hong Kong are under a unified command. Sir Robert works in close collaboration with the naval Commander-in-Chief, Admiral Sir John S. Dill, who spends much of his time there. Singapore has thus assumed the responsibility for which it was created from the day it was chosen to build on this island a great naval base with accommodations for the largest battleship afloat. The Far East has had national representation among the eastern population, both British and European, as well as native organization. Within a few weeks of the Air Chief Marshal's arrival a complete re-organization of British forces in the Far East. The Government of the Straits Settlements, Singapore, and Malaya, has publicly stated that it would not be satisfied if additional reinforcements arrived were

(these have since arrived), and the new C.-in-C. has mentioned that the Imperial Government intends to send more and maintain to the Far East in an increasing force.

These developments, welcomed by all communities in Malaya, are regarded as indicating new vigour on the part of the authorities about the Far Eastern situation. Hitherto they have been viewed as a natural occurrence following the Japanese participation in the tripartite pact with Berlin's entrance. Provisionary measures should prove to the world the groundswell of the League, which pointed the disaster to the Far East of Japan, which were formerly regarded elsewhere. It is now better, there should be a crisis in the Far East in the spirit cheerfully with a fresh move by Germany, in Europe, homeport will be well prepared for any emergency.

Air Chief Marshal Brooke-Popham has wide powers to re-organise the forces under his command. He has direct access to all Colonial Governments within the area for which he is responsible, and he can and does correspond direct with the British representatives in Washington



SEA AREA—SYMBOL OF BRITAIN'S STRATEGY  
This map shows the British Empire's strategic interests in the Far East, the Pacific, the Indian Ocean, and the Straits Settlements, Singapore, and Malaya.



### INDIA: FIRST STEP TO FREEDOM by Sir Stafford Cripps, P.C., M.P.

In a broadcast message to the Indian people on 26th April, 1945, Sir Stafford Cripps said:

You will have heard that the death declaration which I brought to India on behalf of the War Cabinet and which I explained to you in the last time I spoke over the wireless has been referred to your leaders. I am glad that this great opportunity of rallying India to her defence and for freedom has been seized.

No one could have been more fully conscious than I of the great difficulties which have piled up in the way of a settlement of relations between the British and Indian peoples, and even more between the different communities in India. The War Cabinet, in making up this message, realised to the full that Indian opinion—though united in a desire for full self-government—was widely divided as to the method, by which it should be attained. It was with these wide differences of view we had to deal, and it would have been no use if we had closed our eyes to the hard realities of the situation.

In the past British Governments have been accused of being vague from a lack of purpose, and when they stated that it must be left to the Indian representatives to agree among themselves it has been said that this was only a device by which Great Britain might indefinitely retain its control over India. But I believe since the outbreak of the War, the representative of the Indian people, as a result of the spirit which has been shown in the war-effort, a declaration of Indian independence, and second, a constituent assembly to have a new and free constitution for India.

Both of these demands find their place in the death declaration. It was in the light of the demands and criticism of Indian leaders that the War Cabinet drafted this declaration, with the object of removing the Indian people and world public opinion of the ability of their ability to offer freedom to India as the earliest practicable moment. To avoid complaints that had been made in the past, they put me in a clear and precise

plan which would avoid all possibility of Indian self-government being held up by the views of some large section or community. But they left it open for Indian leaders to agree upon an alternative method if they wished.

Of course, every individual and organisation would have liked the death declaration to express its or their point of view, thinking that if it did so would inevitably have been respected by others. The War Cabinet were thus in a position only like an arbitrator who tries to arrange a fair compromise between conflicting parties of view. They could not, however, without changing the very freedom which they were offering, impose a form of government upon the Indian people which they did not themselves freely choose.

Decision has been reached on the scheme from all sides: parties and individuals and with our mandate as a constituent assembly to cover the greatest number of objects, that in all the spirit of fairness those vital parts of the declaration which all agree have never been mentioned. Full and free self-government for India—that is the central feature.

This crucial and unambiguous attitude, necessary enough in the East because of its the matter of peace, and the first step of giving it a comprehensive, but comprehensive there must be if a strong and free India is to come into being. Some day, naturally, the great compromise and parties in India will have to agree upon a method of framing their new constitution. I regard it as a mark of the ability of India, for whom I have a deep and abiding fondness, that the agreement now offered has not been accepted.

For all this concern the future. The immediate difficulties have been to regard the period. First, there was difficulty in confidence. Upon that the attitude of the British Government was very simple. The main object of the declaration of India has been in charge of the Majesty's Government. That charge has been carried out by the most worthy voice by the Government's Chief,

